

LEADERS NOW!

世話すると 馬は応えてくれる

国際大会で総合馬術団体3位！
「常に馬の管理。一番楽しいのは試合」

●社会学部3年次生 大竹 弘晃 さん



フランスのラ・ロシェルで6月に開催された第7回世界大学馬術選手権大会に出場した体育会馬術部の大竹弘晃さんが、総合馬術団体3位に入賞しました。大竹さんは昨年の全日本学生馬術競技大会(第55回全日本学生賞典障害飛越競技大会)でも、団体と個人で2位の成績でした。馬術部の馬場・厩舎が千里山キャンパスから高槻キャンパスに移って2年がたちました。恵まれた環境の中で、部員は20頭の馬の世話をしながら、馬術競技の頂点を目指しています。

大竹弘晃—おおたけ ひろあき
■1986年大阪府生まれ。岡山理科大学附属高校卒業。社会学部3年次生、第1部体育会馬術部所属。

大竹さんら日本選手は、ドイツのプレーメンで合宿してからフランスの大会に臨み、総合馬術団体3位を達成しました。大竹さんにとって海外の試合は初めて。「日本の試合はかなりピリピリした感じがするのですが、外国の選手は気軽に話しかけてくれて、観客も選手も楽しんでいるのが分かり、雰囲気の違いを感じました」

団体の順位は、3人の成績のトータルで決まります。他の2人は明治大学の学生でした。関西大学が2位を占めた昨年の全日本学生馬術競技大会も、優勝したのは明治大学。関大馬術部の面々は、高槻キャンパスの馬場で練習し、打倒明治を目指しています。

馬術競技は障害飛越競技のほか、規定の経路で騎手の技量と調教レベルを競う馬場馬術競技、その2つにクロスカントリーが加わった総合馬術競技があります。

大竹さんが乗馬を始めたのは小学校2年生のころ、観光地で馬に乗ったのがきっかけ。「もっと乗りたい」と言ったことから、地元の乗馬クラブに通うことになりました。中学生になり、試合に出るようになってからは、自ら意識して取り組むようになったそうです。乗馬クラブの場合は個人の成績ですが、大学では団体競技があるので、メンバー全員、チーム全体で盛り上がる雰囲気が楽しいと言います。

部員は毎朝7時半に集合。それぞれ自分の乗っている担当馬をしっかりと世話しています。大竹さんの馬は14歳の「千嵐」。千嵐の名は、代々受け継がれてきました。



「馬は生き物なので、放っておくことはできません。けがもするし病気もする。試合に連れていくのも気を使います。実際に走るの馬ですから。でも、そのコンディションを作るのは人間です。常に気をつけていることは、馬の管理です。ひたすら障害を飛んでいけばよいというわけではなく、上手に休ませてやらなければ。馬にも心があるので、馬が気を悪くするようなことはできません」

良い意味でマイペースで、試合前でもあまりピリピリしないという大竹さんに、馬術の魅力、面白さを聞きました。

「相手は生き物で、自分も生き物だから、こうすれば絶対勝てるというのはありません。どんなに有名でどんなに実績のある馬でも、絶対勝てるとは限らない。勝てると思っていても負けることもあるし、逆に優勝候補でもなんでもない馬が勝ったりして、不確定なところがむしろ面白いですね。かといって偶然ではなくて、何らかの裏付けがあって勝てるわけです」

大竹さんの目標は、全日本学生馬術競技大会の団体と個人で優勝すること。今、一番楽しいと感じる時を聞くと、「試合ですかね。緊張もするけれど充実しています」。頼もしい答えが返ってきました。そこで、上達の秘けつは――。

「練習することと考えることだと思います。同じ馬でも、時間とともに様子が変わってきます。年を取れば体力的に落ちてくることもあるし、若い馬だと元気がすぎることもある。馬の管理を一日中考えていると計画性が身につきます。心をこめて世話すると、ちゃんと応えてくれますよ」

法律を 分かりやすい言葉で

法律の専門家の難しい言葉に反発
「関西大学法律相談所が学びの場だった」

●大阪弁護士会 会長
小寺 一矢 さん—法学部 1964年卒業—

今年4月に大阪弁護士会会長に就任した小寺一矢さん。法律を通じた地域社会とのかかわりは、関西大学在学中の「法律相談所」の活動に始まります。小寺さんは、関西大学法律相談所が1962年に千里山法律学会から独立した時のメンバーです。「相談に来られる当事者の方々と一緒に悩みながら勉強させてもらいました」。折しも、法的な問題で困っている市民を支援する「法テラス」(日本司法支援センター)がスタートした10月2日、大阪弁護士会館を訪ね、小寺さんに話を伺いました。

小寺 一矢—こてら かずや
■1941年、大阪府生まれ。64年、関西大学法学部卒業。67年、同大学院修士課程(私法学専攻)修了。71年から弁護士。2006年4月、第126代大阪弁護士会会長に就任。



「弁護士になって以来、この職に就いたことを悔やんだことは一度もありません。まさに天職だと思っています」。小寺さんは祖父も父親も医者という家に育ちましたが、「弁護士は依頼された仕事を通して自分の生きざまを体現できる」と言います。それだからこそ、「絶対に自己の利を求めることがあってはならない、それを目的に生きる人はこの仕事に就いてはいけません」。

小寺さんにとって弁護士業の原点である関西大学法律相談所は、現在も無料で法律相談や地方での夏期移動法律相談を行っています。62年当時、公法中心の勉強会が多かった千里山法律学会(千法会)に対して、民事を学びたい学生が集まって「独立運動」を展開。千法会の会長であり、法律相談所の所長であった中谷敬寿学長に相談もせず、勝手に民事系の先生に顧問を頼みに行ったことから、学長室に呼び出されてしかられたことも。「中谷先生は一学生を相手に真剣にしかられました。先生からは社会人として生きていく上での厳しさを教えてもらいました」

天六学舎で土曜日の午後法律相談所を開き、教室で学べない多くのことを経験した一方で、学生責任者として組織づくりや先生方との交渉に力を入れるあまり、肝心の法律の勉強が遅れてしまったと苦笑い。しかし、持ち前の「なにくそ精神」でやってきたという小寺さんは、「そのようなことができるのが学生の特権であり、青臭くても議論をどンドンしてほしい。そ



のためには本を読み、専門以外の勉強もしっかりやらなければ」と若者にエールを送ります。

「法律の専門家は、やたらと難しい言葉を使いたがります。それが私は大嫌い、若いころから反発を感じました。関大時代も、普通の日本語で言ってもらえませんかと言いたい授業が少なくなかったですね。なぜもっと平易に言えないのでしょうか。法律は国民のものであり、普通の国民が聞いて理解できないような言葉を専門家同士が隠語みたいに話して、いかにも偉いんだと錯覚している。私が20年間ほどテレビに出演してきたのは、法律について分かりやすい言葉で伝えよう、こけおどしはやめようという思いからです。法律とは、人間と人間が生きていく上で必要なルールですから、本来分かりやすければルールにならないはず。それを専門家が読み解かなければならないのは、実におかしいのです」

ガラス張りの大阪弁護士会の新会館は、9月4日にオープンしました。会員が3,000人を超え、10年後には5,000人の規模になるそうです。弁護士が今後、さまざまな分野に進出し、業務を広げていく基盤にこの会館を使うとともに、府民、市民が利用しやすく、生活になじむ会館にしていきたいと、小寺さんは将来を見据えつつ、後輩にも期待しています。

「それぞれの事件は、弁護士にとっては日常的に数ある中の一つでも、その人にとっては一生に一度あるかないかの大事なことなんです。一人ずつ顔が違うように、その一つ一つが大切なんだということを、若い連中にいつも言っています」